

山の神さん

むかしむかし、ずっとむかしのこと。

この村に、それはそれは悪い山の神さんが住んでいたそうだ。その山の神さんには十二人の子どもがいて、この子どもたちをしとねるために、村の子どもをさらつてたんだな。

山の神さんは、いつもがけの上に立つて街道を見下ろしていたんだわ。山の神さんは、どえりやあ目と鼻の持ち主で、はるか向こうに豆つぶほどの黒いかげが現れると、「子どもだあ、子どもが来るぞ。」

と、特別よく見える目ですぐに見分けたそうだ。そよ吹く風にまじつて、かすかなにおいがただようと、

「おや、くさいぞ、くさいぞ、人くさいぞう。」
と、特別よくきく鼻ですぐにかぎ分けたそうだ。

それでなあ、山の神さんは、子どもを見ると、長い髪の毛をふりみだし、おおかみよりもはやく山を走り、馬よりもはやく野原をかけて、先回りして街道のやぶかげに

かくれて、子どもをつか
まえちゃう。その身のこ
なしのすばやいこととい
つたら、たとえようがに
やあわ。

人・さ・ら・い・に・あ・つ・て・困・り

はてた村の人たちは、

「山の神さんをやっつけ
る、ええかんこうはに

やあかなあ。」

「こすくて、おそぎやあ

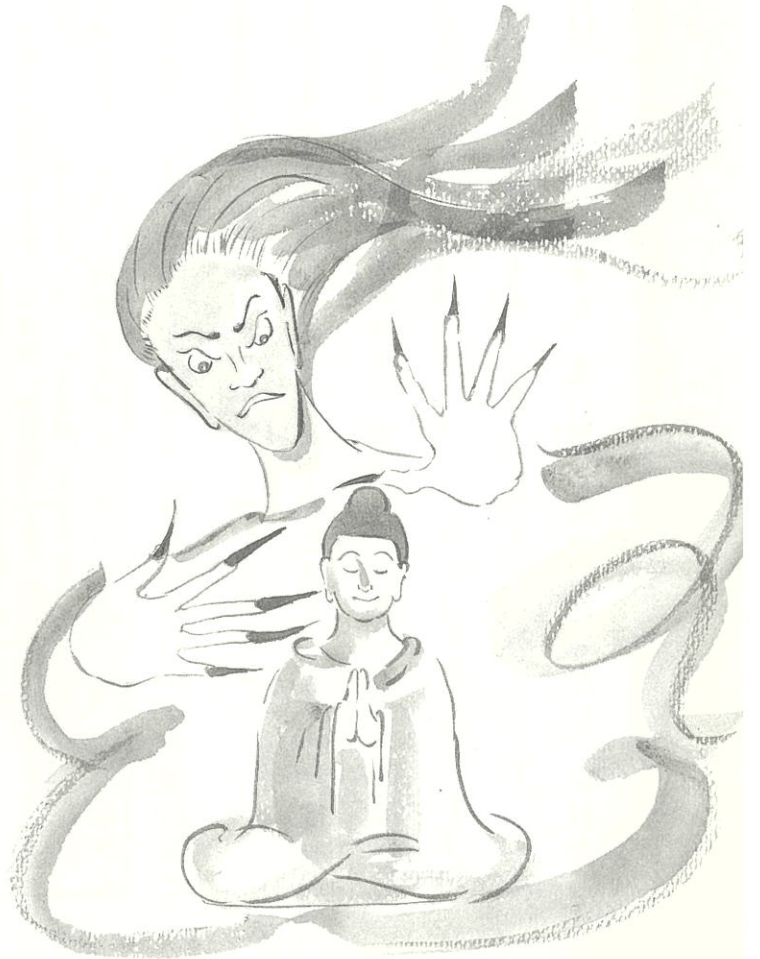
神さんだで、むずかしいわなあ。」

と、どう思案しあんしても、いい方法が見つかりやひん。

そいで、みんなで、里さとの仏さんにおたのみすることにしたんだわ。仏さんは、

「わかりました。お力ちからになりましたよ。」

と、村の人たちのおたのみを聞いてくだされて、すぐに、山の神さんの末っ子をつか



まえて、かくしてしまわれたんだわな。かわいいわが子のいないのに気づいた山の神さんは、目を皿さらのようにし、鼻を大筒おおづつのようにして、気がくるったように、探し回さがったそうだと。

それを見た仏さんは、

「今後、村の子どもをさらわないと約束するならば、あなたの子どもを返してあげましょう。」

と、山の神さんにいったんだと。山の神さんは、

「悪うございました。もう、決していたしません。約束いぶします。お許ゆるしてください。どうか子どもをお返しくください。お願いいたします。」

と、真顔まがねであやまつたんだわな。

里の仏さんは、山の神さんのいうことを信じて、かくした子どもを返してやられたんだわ。山の神さんは、今までの自分の行いをおおいに反省はんせいして、これからは、村の守り神になろうと決心したそうだと。

吉田地区に伝わる話です。

農村では、山の神は、春に山からおりてきて「田の神」になり、秋に山にもどって「山の神」になると信じられていました。山の神は、豊作の神様です。